

大和平野中央田園都市構想
(令和4年度第4回検討会 まとめ)

- ▷テーマ： 知的な大和平野中央を創造する
- ▷日時； 2022年12月20日
- ▷場所： 三宅町交流まちづくりセンター「Mi i Mo」
- ▷講師： 京都大学名誉教授小寺秀俊氏
- ▷主な出席者： 奈良県荒井知事、川西町小澤町長、三宅町森田町長、田原本町森町長、奈良県立医科大学細井学長、奈良先端科学技術大学院大学塩崎学長、慶應義塾大学矢作名誉教授、スタンフォード大学循環器科池野主任研究員など。
- ▷内容 第4回検討会は、「知的な大和平野中央を創造する」に焦点を置き、議論が展開された。

会議に先立ち、荒井知事から三宅町に新設される県立工科大学（仮称）の説明があった。荒井知事は、産学官連携の拠点として、令和8年目標に大学院を先行設置し、三宅町にキャンパスができるまでには、仮キャンパスでスタートさせる方針を明らかにした。校舎の横に、知的交流拠点としてのスタートアップヴィレッジが整備される。

県立工科大学のイメージについては、研究と教育の両方がハイレベルでなければならず、特色ある研究拠点整備が必須になる。そのためには、豊かな人間性と広い人格を備え、世界のトップレベルの人たちとお付き合いできる教養にあふれた技術者を育成していく。こうした技術者を育成するためには、優秀な教授陣を確保することから、定年制にこだわらず、柔軟な学校にしていく方針だ。また、同工科大学・大学院は「大和平野中央田園都市構想」の拠点として、地域とも積極的に交流。例えば、リカレント教育などに関わっていく。特に、リカレント教育と関連するのが、スタートアップヴィレッジで、人生半ばで「まだ、これからも働きたい」という人にキャンパスに来てもらって新しい教育、再教育を受けて、ヴィレッジの新たな担い手になってもらいたいとしている。地域で教育された人を生かし、社会と教育が同時に変わっていく姿を描いている。

また、同構想の政策テーマについて、就学前児童のはぐくみの場を磯城郡3町内に設置させていく。3町とも「就学前のはぐくみの場づくりに積極的に連携していきたい」との対応を明らかにしており、3町との連携・協働して詳細を詰める。就業支援についても、新しいタイプのハローワーク的な拠点を磯城郡3町内に設置すると発表された。

さらに、荒井知事から新大学の学長候補者として京都大学名誉教授・小寺秀俊氏の紹介があり、続いて小寺名誉教授から県立工科大学（仮称）の「大学・大学院設置に向けての考え」についての発表があった。

小寺氏は、「日本には、工学部のある大学は96あるが、同じような大学をつくっても意味がない。われわれは、世界中から人材が集まって、高度な研究を基本にしながら、そこで生まれたものを社会実装していけるサイエンスパークのような大学・大学院をイメージしている。もちろん、学生から見ても、魅力がある大学・大学院を目指す」と目標を掲げ、大学の建学の精神、理念の重要性もコミットした。民間企業が大学内にラボ（研究施設）を持ち、人々が日常的に出会って交流できるキャンパスを形成していく。

ただし、大学の具体的なかたちは「10年、20年くらいの時間を経て、ようやく形作られていくのが一般的なので、ある程度、じっくり見てほしい（小寺氏）と理解を求めた。

特に、大学設置に向けて、当面やるべきこととして、第一に教員の確保を掲げ、70～75歳であっても長いキャリアパスを持ち、素晴らしい人材であれば受け入れていく意向を明らかにした。

また、奈良県立医科大学細井学長や奈良先端科学技術大学院大学塩崎学長に対し、積極的な連携、協力を要請。「県立工科大学（仮称）としてのネットワークを構築していくことが非常に重要」（同）と強調した。小寺氏は、2023年春には、「一つのかたちにして次のステップに移らないといけない」との認識を示した。

討論に入り、「奈良県立大学工学系新学部のあり方検討委員会」の座長も務める慶應義塾大学矢作名誉教授は、「大学の具体的なイメージが理解でき、安心した」とした上で、同検討委員で議論された新大学のコンセプト、カリキュラムなどについての確認する旨の質問を寄せた。

これに対し、小寺氏は、①大学院・大学を設立するという点で検討している②大学院のカリキュラム自体はそれほど難しくないが、修士と博士の関係や5年一貫にするのかなどの制度設計についてはもう少し検討が必要③講義については、学生のレベルに合わせて、基礎学力と応用の分野をつなげるカリキュラム構造を検討している一などと回答した。

また、川西町・小澤町長も新設される県立工科大学（仮称）に対する期待の表明とともに、スタートアップヴィレッジなどができることから地元自治体として、こういったフォロー体制を考えておけばよいかなどの質問を寄せた。

この質問に対し、小寺氏は、改めてネットワークの重要性を強調。例えば「工学に関するスタートアップを創ろうとすると、小さな部品とか原理の研究開発から生まれることが多く、そのままでは製品にならない。従って、一つの

ものにしていくシステムアップのようなものが必要で、民間企業や金融、自治体などのネットワークを組んでおく必要がある」（同）と回答した。また「スタートアップにとっては、工場や研究所を持つだけでなく、ネットワークを生かしたコーディネーション力も問われることになるはずだ」との見解を示した。

スタンフォード大学循環器科池野主任研究員は、「大和平野中央田園都市構想」のコンセプトを改めて確認。大きな目的として、県立工科大学（仮称）設立を契機に、スタートアップのエコシステムを創ることにあるとし、地元住民をはじめ、別の地域から来た人々との交流を含め、まちづくりをしていくことにあると説明した。磯城郡3町の課題は、日本の未来のみならず、世界の未来の課題を先取りするという意味で、ニーズドリブン、マーケットインの発想で同大学が果たすべき役割について言及した。また、スタンフォード大学で、工学部と医学部の連携が大きく促進したクラークセンターの事例なども紹介した。

奈良県立医科大学の細井学長は、今後の医工連携に前向きな姿勢を示し、奈良先端科学技術大学院大学塩崎学長も「新しい大学をゼロから創るわけだから、既存の大学とは違った形で問題解決に取り組んでいける」と大きな期待を寄せた。

また、改めて矢作名誉教授は「市場価値のある博士課程教育を実施するということが極めて重要で、博士課程のレベルがその大学のレベルを決めてしまう要素があるので「ぜひ頑張ってもらいたい」との注文も寄せた。

最後に荒井知事は、研究と教育についてどのようにしていくか、改めてその重要性について言及し、研究者、教育者の処遇についてもコメントを寄せた。

新大学の建学の精神については、県立大学という点から荒井知事は「恐らく、県が決めていくことになる」との見解を示し、できるだけ早めの創設をコミットした。さらに、医工連携しやすいように県立医大との地域拠点についても、オープンカフェ、交流サロン、セミナーハウスなどの設置を前向きに考えていく見解を示した。